北京研究連絡センター
カントリーレポート(モンゴル編)

2015 年 4 月 30 日

日本学術振興会北京研究連絡センター

カントリーレポート（モンゴル編）目次

１．　はじめに　4

２．モンゴル基本データおよび学術関係状況　4

（１）モンゴル国基本データ

●基本情報

●人口分布

●GDP の推移

●科学技術研究開発の状況

●日本との交流・協力関係の状況

（２）高等教育関連状況

●教育システム

●大学の数、質、学生数および研究状況

●大学進学率

（３）留学生の動向

●留学生のモビリティ

●日本の留学生戦略との関係

３．学術交流関係機関　12

３－１．モンゴル側学術機関　12

（１）教育文化科学省（Ministry of Education, Culture and Science, MECS）

（２）大学

●モンゴルの主要国立大学の概要

（３）モンゴル科学院（Mongolian Academy of Sciences: MAS）

（４）モンゴル科学技術基金 (Mongolian Foundation for Science and Technology: MFST)

（５）その他関係団体

●新産業創出機構(New Industry Association)（新産業会）

●JUGAMO (Japanese University Graduate Association of Mongolia)

●HAKASE（博士会）

●モンゴル日本人会

●モンツァメ国営通信社

３－２．日本側学術関係機関　17

（１）主な日本の政府機関

●在モンゴル日本大使館

●モンゴル日本人材開発センター（MOJC）

●JICA モンゴル事務所
（２）日本の大学事務所

４．日本の大学および JSPS の事業実施状況 19
（１）日本の大学の留学説明会・留学フェア
●JASSO 他主催の「日本留学説明会」
（２）JSPS 事業説明会
●国立大学合同 JSPS 事業説明会
●主要大学における JSPS 事業説明会
●個別大学におけるセミナーおよび JSPS 事業説明会
●モンゴル科学技術基金（MFST）訪問と JSPS 事業説明
●モンゴル科学院（MAS）訪問と JSPS 事業説明
（３）同窓会関連活動
●日本留学経験者の同窓会

５．おわりに 25

謝辞 26

参考文献 26

資料１ 28

１．はじめに

モンゴルと日本との間には政治、経済、社会において良好な関係が築かれて来ている。さらに最近の両首脳の相互訪問や会談に見られるとおり、一層の関係強化がうたわれている。また、モンゴルは日本語学習者数や日本への留学生数が人口比で最も高い国とされ、教育文化科学大臣をはじめ閣僚や政府要職者にも日本留学経験者が多いなど、文化・学術の面からも両国の関係強化を進めるにはきわめてよい環境にあると考える。これらの状況から、両国の産業・経済交流の基盤となる学術・研究開発の交流の面からも、また留学生30 万人計画を目指す留学生政策からも、日本にとってのモンゴルとの学術交流の重要性が再認識される。

このような背景の中で、JSPS 北京研究連絡センターでは 2014 年よりモンゴルと日本との学術交流の支援を担当することになった。初年度の活動として、モンゴルにおける学術状況の基礎的データを収集するとともに、現地の学術機関、大学、日本政府関係機関などを訪問し議論することを通じて現状を把握することを目標とした。本カントリーレポートは、今後モンゴルにおいて JSPS あるいは日本の大学・研究所がどのような活動を行うことが出来るかを検討するための一助となるように、モンゴルの学術関係の基礎的な情報をまとめたものである。

以下では、まずモンゴル国全般と学術関係の基礎的情報についての調査結果を述べ、次にモンゴル側および日本側の学術関係機関の活動状況を報告する。最後に 2014 年度に実施した JSPS 事業の概要を示す。なお、今回の調査は網羅的調査や資料検索によるものではなく、センター所員が現地に出張訪問して入手した情報を基にしているため、公平で十分な記述になっていない部分もあるかと思われるがご容赦頂ければ幸いである。今後の改訂による改善を期待したい。

２．モンゴル基本データおよび学術関係状況

（1）モンゴル国基本データ

●基本情報

基本的なデータを以下に示す。人口の半数が首都ウランバートルに集中している。

・面積：156.4 万平方キロ（日本の 4.14 倍）
・人口：286 万 8,000 人（2012 年，モンゴル国家統計委員会）
・首都ウランバートル人口：131 万 8,100 人（2012 年，モンゴル国家統計委員会）
・歴史：1921 年中国から独立、その後ソ連の社会主義の下。
　　1990 年民主化、92 年東欧の社会主義崩壊に伴い資本主義政策に転換。
・政治体制：共和制（大統領制と議院内閣制の併用）

●人口分布

図１のような分布となっており、18 歳人口は現在減少しつつあるが 10 年以内には回復に転じていると考えられ、日本のような継続的な少子化は見込まれていない。

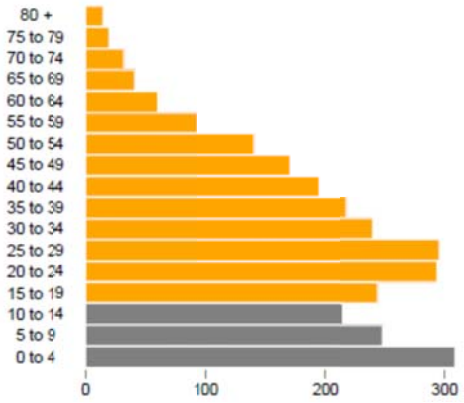


図１．人口分布（縦軸：才、横軸：千人）（2013 年）

資料：UNESCO, UNESCO Institute for Statistics, COUNTRY PROFILES: http://www.uis.unesco.org/DataCentre/Pages/country-profile.aspx?code=4960&SPSLanguage=EN

●GDP の推移

鉱物資源が豊富で、近年経済成長が顕著であることから各国、特に韓国、中国からの企業進出が活発化している。2008-09 年の世界経済危機の後、経済成長率は 2011 年には２桁台に回復し、世界でも有数の高成長を遂げている。2012-13 年の主要データを以下に示す。

・GDP（名目総生産）：1151.6 万米ドル（2013 年国連）
・１人当たり GDP：3,770 米ドル（2013 年世界銀行）
・経済成長率 11.7%（2013 年モンゴル国家統計委員会）
・インフレ率 12.5%（2013 年モンゴル国家統計委員会）
・失業率　7.9%（2013 年モンゴル国家統計委員会）

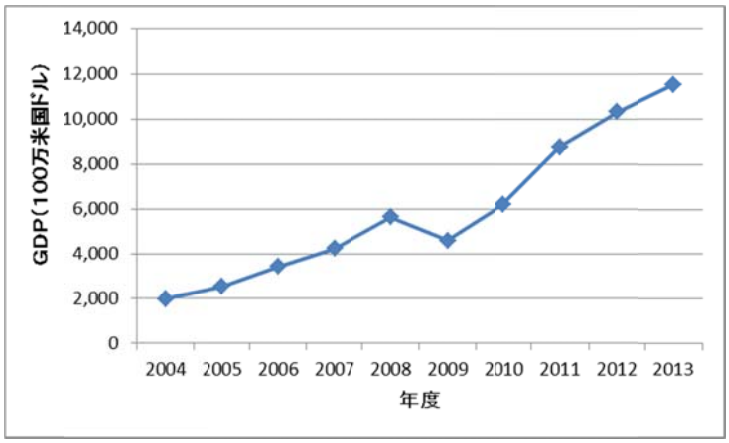


図２．GDP の推移

資料：GLOBAL NOTE、　出典：国連　http://www.globalnote.jp/post-12794.html

●科学技術研究開発の状況

モンゴルの科学技術研究開発の状況を見るために、以下の表では人口当たりの GDP、GDP に占める研究開発費の割合とその使途の内訳の率、および 100 万人あたりの研究者数のを示したもので、参考として中国、日本の数値も記載した。モンゴルの産業・経済の状況を GDP の絶対額でみると日中との間に極めて大きな差（３桁程度）が認められるが、人口当たりの GDP で見ると、近年の発展により相当の改善がみられる。しかしながら、科学技術の関する研究開発予算への配分はGDP比でみてもまだ日本に比べて１桁程度の差があり、また研究者人口の人口全体に対する比率でも１桁程度の差がある。さらに注目すべき点として、研究開発費の使われるセクターが日中では民間企業が大半を占めているのに対してモンゴルでは政府による使用が大半であることである。付加価値のある工業技術製品を生み出す企業はまだ育っていないことを示しており、それだけ政府の科学技術戦略の役割が大きくなっている。また、共同研究をはじめ科学技術交流を行う場合には、このような平均的環境とは別に、個別の研究チームの学問領域や研究状況についての調査と評価が重要になるものと思われる。

表１．研究開発費および研究開発者数の状態を中国、日本と比較した表

項目		モンゴル	中国	日本
人口１人当たりの GDP（PPP$）*		5,374	9,083	35,178
GDP に占める研究開発費の率（%）		0.27	1.84	3.39
研究開発費使途の内訳（%）	企業	6.8	75.7	77.0
	政府	75.3	16.3	8.4
	高等教育	12.6	7.9	13.2
	外国	0	—	1.5
	その他	5.4	—	—
人口 100 万人当たりの研究者数**（人）		653	1,393	7,011

* 購買力平価（purchasing power parity）

** 頭数(HC)データを記載

出典：UNESCO Institute for Statistics のデータ（2011 年度）により作成

http://www.uis.unesco.org/DataCentre/Pages/country-profile.aspx?code=MNG&regioncode=40505（および末尾 CHN&regioncode=40515 , JPN&regioncode=40515 ）

●日本との交流・協力関係の状況

2013 年 3 月安倍総理の来訪時に「エルチ・イニシアティブ」として発電所効率向上のための円借款の供与、ウランバートル市内の大気汚染改善の技術協力、タバントルゴイ炭田開発への日本企業の参画、工学系高等教育機関の機能強化と我が国への留学を通じたモンゴル国の産業人材育成への協力等の可能性を表明し、一部は実施に移っている。また、2013 年 9 月には日モンゴル両首脳は共同声明を発表し、「戦略的パートナーシップのための日本・モンゴル中期行動計画」を策定して文化・人的交流分野における関係を拡大すること等を表明した。その後も互いに大臣級の訪問が継続している。さらに、モンゴルでは教育文化科学大臣をはじめとして閣僚、行政官、および産官学各界の要人として多数の日本留学経験者が活躍しており、日本との交流にとって良い環境が整っている。

参考：世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）文科省

www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm

外務省　HP：　モンゴル国基礎データ：二国間関係

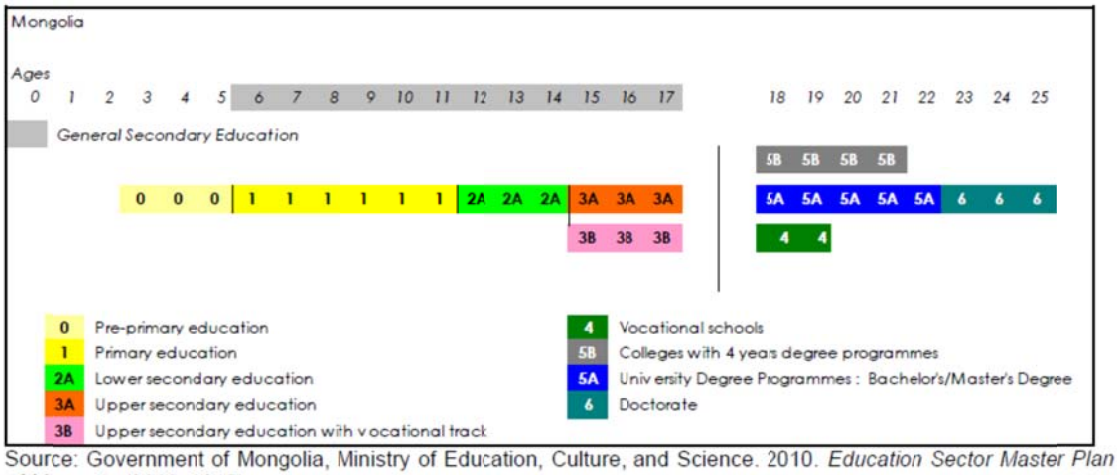
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html#section4

（2）高等教育関連状況

1990 年の民主化以降、特に 90 年代後半に極めて多くの大学が創設され一時は 200 校を超えた。また、従来教育は大学が、研究についてはモンゴル科学院が担うという体制にあった。大学数は現在 100 校程度に減少している。また、これに並行して大学の研究機能を向上させるための改革が現在進行中である。

●教育システム

大学は 6＋3＋3 年制の後入学、学士 4 年か、一貫して修士までを 5 年かで修了、その後博士課程がある。高専 5 年のコースも最近でき、日本のシステムに似ている。学期は秋に開始する。



Source: Government of Mongolia, Ministry of Education, Culture, and Science. 2010. *Education Sector Master Plan of Mongolia (2009–2015).*

図３．教育システムの概略図

出典：Government of Mongolia, Ministry of Education, Culture, and Science. 2010. Education Sector Master Plan of Mongolia (2009–2015)
http://www.adb.org/sites/default/files/linked-documents/43007-023-mon-ssa.pdf

●大学の数、質、学生数および研究状況

1990 年代後半に極めて多くの大学が創設され、2003－04 年で 183 校（国立 48、私立 128 校）あったが、2011 年までに徐々に減り、現在は以下の表２のように 101 校となっている。

表２．大学の数

大学種別	国立	私立	外国の大学	合計
2014-15 年校数	16	80	5	101

出典：モンゴル教育文化科学省 HP：
http://www.meds.gov.mn/data/1501/WEBD/03/02%20Surguuliin%20too%20bairshil.pdf

このうち主要な大学のほとんどがウランバートル市内に集中している。学生数は最も多いところではモンゴル科学技術大学で３万人以上、モンゴル国立大学で２万人以上である。（３－２参照）全体の大学生数は 2012－13 年で、約 17.6 万人、うち女子学生が 10.2 万人である。

出典：2012 年統計資料による

資料：A. Pandey and G. Tsendsuren, “Challenges in Knowledge Management in Higher Education Institutes in Mongolia: A Report on Secondary Survey,” 30 Jun 2013, http://www.unimis.edu.mn/buteel/File/Download?id=5d6c2413-b57f-4b69-944d-bdde7654ec1e2013-06-30-IFOST-Challenges%20in%20Higher%20Education.pdf

一方、これらの大学の中にはまだ日本の専門学校に該当する水準のものや非常に小規模なものも含まれているので、留学生受け入れの場合などには留意が必要である。また、大規模な大学でも優秀な教員を確保することには苦労していることがうかがえる。学部卒業後すぐ大学教員になるケースも見られる。教員システムにおける若手研究者の立場は日本とは違い、ポスドク研究員の制度は定着していない模様である。JSPS フェローシップなどの利用の際にはフレキシブルな適用を考える必要がある。

研究の水準に関しては、訪問・見学した範囲でみられる限り、平均的水準はまだ高くない。たとえば物理実験系の研究を実行していくためには、高度な作製技術を要する試料は外国との共同研究で入手し評価分析を担当するなどの方策を講じているとみられる。一方、重点研究グループで先端的な大型設備を導入しているところや、極めて特徴的な研究を行っている研究グループもみられるので、共同研究によって相補的なメリットを享受できる可能性も十分高いものと思われる。

●大学進学率

図に平均進学率と男女別の進学率の推移を示す。近年大学進学率は大きく増加の傾向を示しており、2013 年の進学率は女子 73.3%、男子 51.5%、平均 62.3%である。（UNESCO Institute for Statistics）平均の進学率約 62%は日本（約 51%）より高い。歴史的に男子の子弟は遊牧につかせることが多かったことから、女子に高い教育を受けさせ教師、弁護士、医者などといった専門的な職業につかせたいという考えがあると言われている。

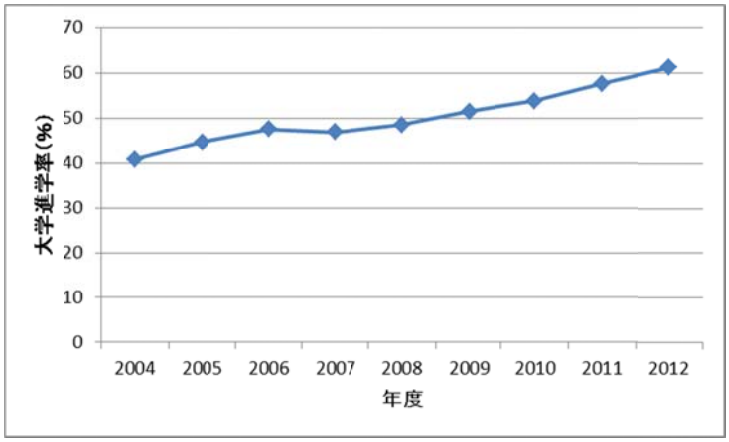


図４－１．大学進学率（男女平均）

資料： GLOBAL NOTE，出典:UNESCO

http://www.globalnote.jp/post-1465.html

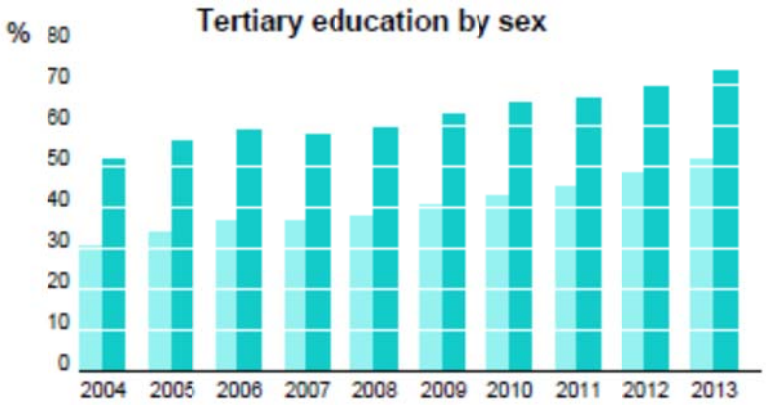


図４－２．進学率の男女別推移（各年で左側が男子、右側が女子のデータ）

資料：UNESCO, UNESCO Institute for Statistics, COUNTRY PROFILES:
http://www.uis.unesco.org/DataCentre/Pages/country-profile.aspx?code=4960&SPSLanguage=EN

（３）留学生の動向

日本留学経験者が主要な大学や政府機関の要職に就く他、親日的で日本は留学先として人気が高い。また日本語学習者数は人口比で最も多い国であり、日本への留学生も人口比で、人口１万人あたりで 3.98 人であり、最も高い国となっている。さらに、モンゴル人学生の特徴として個人的な資質に優れている学生が多く、モンゴル人留学生を受け入れた日本人教員の評価は高い。留学生の輩出において高いポテンシャルをもっていると考えられる。

参考：駐日モンゴル国大使館 HP、2 国間交流―文化・教育・学術
http://www.tokyo.embassy.mn/jpn/index.php?moduls=17

●留学生のモビリティ

モンゴル留学生が目指す国については、近年、中国同様に生活水準の向上につれてアメリカ留学への指向が強まっている。一方、日本に留学した場合卒業後の日本での就職先に不安があるなどの理由により留学志望者が減少する傾向にあり、モンゴルと日本との学術・経済交流の梃入れを望む声も聞かれる。図５はモンゴルと外国との間の大学生のモビリティを示したものである。2012 年モンゴルからの留学生数は合計 10,717 名、主な留学先としては韓国（2,618 名）、ロシア、米国、日本（1,157 名）の順となっている。他方、モンゴルへの留学生受け入れはまだ少なく、中国（357 名）が１位、日本は８位で 22 名である。

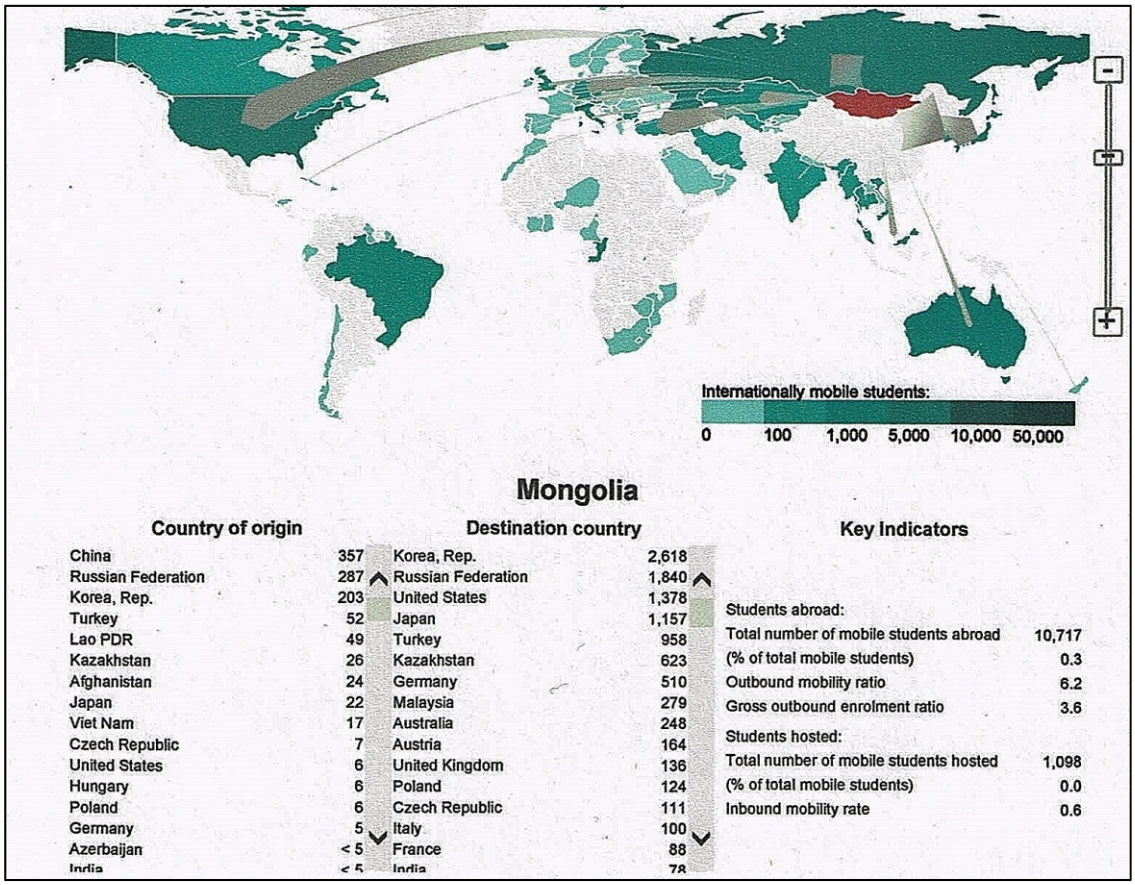


図５．モンゴルにおける外国人留学生数とモンゴルから外国への留学生数（矢印）

資料：UNESCO, Institute for Statistics, GLOBAL FLOW OF TERTIARY-LEVEL STUDENTS:
http://www.uis.unesco.org/Education/Pages/international-student-flow-viz.aspx

●日本の留学生戦略との関係

2013年に文科省の「戦略的な留学生交流の推進に関する検討会」によって発表された「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）」では、東アジアの留学生戦略について以下のように述べられている。

・東アジアの中でも，我が国との関係が強く親日国であり、資源確保の観点からも関係を強化することが重要なモンゴルを中心として留学生の受入れを促進する。

・帰国留学生が国の要職に就任していることを踏まえ、日モンゴルの一層の関係強化に資するため、行政官等を含む留学生も含め、受入れに積極的に取り組む。また、「エルチ・イニシアティブ」や「戦略的パートナーシップのための日本・モンゴル中期行動計画」で示された人的交流の拡大を図る観点から、特に、モンゴルで必要の高い工学分野を中心とした留学生の受入れに取り組む。

このように、留学生受け入れについて東アジアでの最重点地域として捉えられている。

参考：世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）文科省
www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm

３．学術交流関係機関

３－１．モンゴル側学術機関

（１） 教育文化科学省（Ministry of Education, Culture and Science, MECS）

●省構造

大臣、副大臣、事務次官のもとに以下の部門がある。

・Department of Science and Technology（科学技術全般）
・Department of Higher and Vocational Education（教育全般）
・Department of Public Administration and Management（行政管理全般）
・Department of Information, Monitoring and Evaluation（情報,モニタリング,評価）

参考：モンゴル教育文化科学省 HP（Organization structure）
http://www.meds.gov.mn/frontpage

●大臣

2012 年からガントゥムル（Luvsannyam Gantumur）大臣（1996-99 長岡技術科学大学出身）

参考： モンゴル教育文化科学省 HP（Minister）
http://www.meds.gov.mn/Minister

ガントゥムル大臣

（２）大学

●モンゴルの主要な国立大学（主キャンパスはいずれもウランバートル市内）

以下には代表的な国立大学 5 校についての概要を表３に掲載する。いずれも主キャンパスはウランバートル市内にあり、各専門分野におけるトップレベルの大学である。

モンゴル国立大学の本部校舎前の風景

表３．主要な国立大学の概要

大学名 URL	モンゴル国立大学　（National University of Mongolia, NUM） http://www.num.edu.mn/en/contentpage.htm?mtype=0&mid=2
設立	1942 年、大学院 1947 年、科学技術大学を分離 1969 年
人員	学部生 19,605 名、大学院生 3,385 名、教員 1,035 名、留学生 331 名(2014 年)
主な学部	Business School School of International Relations and Public Administration School of Law School of Engineering and Applied Sciences School of Arts and Sciences Graduate school 他に 2 分校、1 付属高校がある。（ウランバートル大学を 2010 年に併合）

大学名 URL	モンゴル科学技術大学（The Mongolian University of Science and Technology, MUST） http://must.edu.mn/must_en/index.php
設立	1959 年（MNU 内）
人員	学部生 27,367 名、大学院生 3,796 名、教員 1,140 名（2014 年）
主な学部	School of Civil Engineering and Architecture School of Geology and Petroleum Engineering School of Technology in Darkhan School of Computer Science and Management School of Mathematics School of Materials Science School of Mechanical Engineering School of Information and Telecommunication Technology School of Social Technology School of Mining Engineering School of Industrial Technology and Design School of Food Engineering and Biotechnology E-OPEN SCHOOL OF MONGOLIAN UNIVERSITY SCIENCE AND TECHNOLOGY School of Power Engineering 他に付属高校がある。（教員>20 名、生徒数 681 名、クラス数 19）

大学名 URL	モンゴル教育大学（Mongolian State University of Education, MNUE） http://msue.edu.mn/en/
設立	1959 年（MNU 内）
人員	学生 13,500 名、教員 500 名（2014 年）
主な学部	School of Humanities and Social Sciences

	School of Mathematics and Natural Sciences School of Arts and Physical Education School of Educational Studies Teachers School

大学名 URL	国立モンゴル医科学大学（Mongolian National University of Medical Sciences, MNUMS） http://mnums.edu.mn/index.php
設立	1942 年、大学院 2003 年
人員	学部生 5,890 名、看護学部生 1,917 名、大学院生 1,523 名、教員 949 名，職員 167 名（2013 年）
主な学部	School of Medicine School of Pharmacy and Bio-Medicine School of Dentistry School of Nursing 他に教員養成所がある。

大学名 URL	モンゴル生命科学大学（Mongolian University of Life Sciences, MULS） （旧モンゴル農業大学（Mongolian State University of Agriculture, MSUA）） http://www.msua.edu.mn/
設立	1958 年、大学院 2003 年
人員	学部生 7,060 名、大学院生 1,045 名（2008 年）
主な学部	School of Veterinary Medicine and Biotechnology School of Biological Resources and Management School of Agrobiology and Engineering School of Economics and Business School of Natural Sciences and Ecology School of Technology and Development School of Graduate Studies

出典：各大学の HP および大学発行のパンフレットによる

（３）モンゴル科学院（Mongolian Academy of Sciences: MAS）

モンゴル科学院は 1961 年に再編され、国家から独立した公益機関としての性質を有しつつ、モンゴル州議会による法律により国内における科学技術発展を目的とした科学技術に関する中心的シンクタンク機関として認められてきた。旧ソビエトのアカデミー制度に由来しているため、中国科学院(Chinese Academy of Sciences：CAS)と性質を同じくする面がある。図 6 の機構図および本レポート末尾の資料 1（リンク先を含む）に示す通り、自然科学だけでなく社会科学も含め 23 の研究所、研究センターなどを運営している。国内研究者数は約 1200 名。しかし最近は活動の評価が十分に行われて来ず、予算措置も十分には取られていないためパーフォーマンスは十分でないとみられている。教育文化科学省が現在

その改革を大学の研究機能の強化と並行して進めようとしている。科学院の研究所と大学との融合を図るなどの案が検討されている模様である。
参考：http://www.mas.ac.mn/index.php?lang=mn

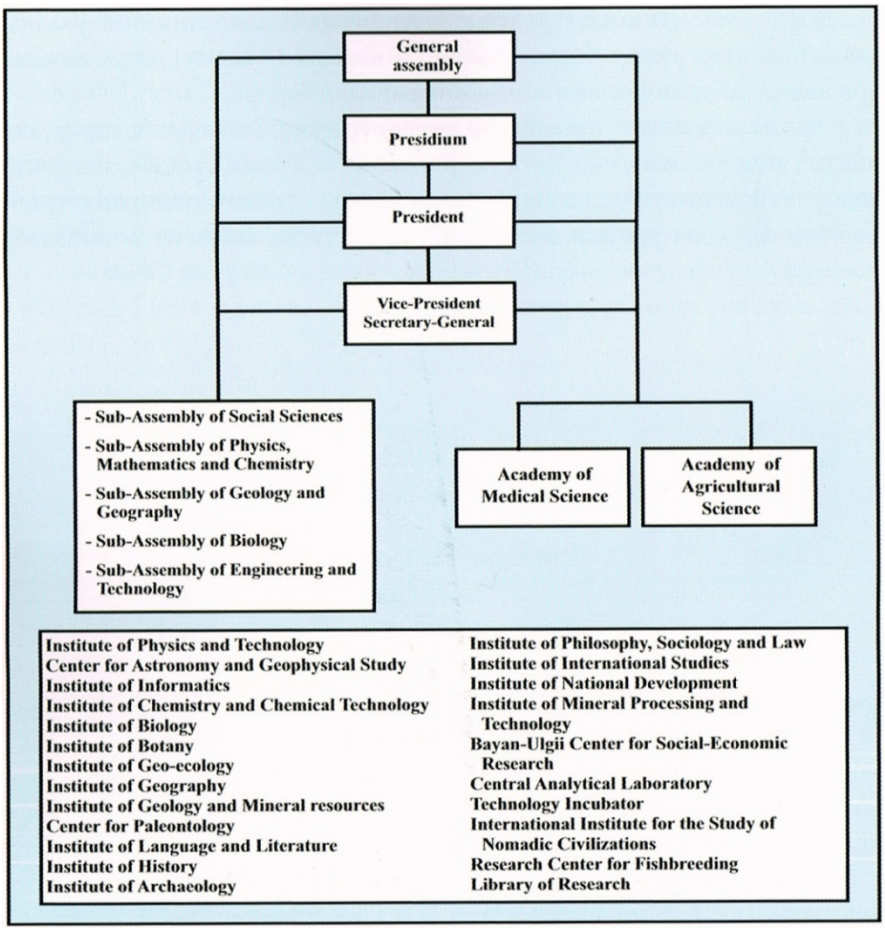


図６．モンゴル科学院の機構図
Mongolian Academy of Sciences (published by MAS, ISBN 978-99962-3-035-6)

（４）モンゴル科学技術基金 (Mongolian Foundation for Science and Technology: MFST)

政府が 1993 年に科学技術に関する組織として設立、2006 年から教育文化科学省の傘下で大学や研究所における科学技術分野の研究開発支援機関として機能している。図 7 には科学技術関連セクターの構成が示されている。MFST の事業分野は JSPS および JST と類似するところが多い。本部には 20－30 名規模の職員、研究費と運営費を含めた予算額として 20 億円弱である。本部機構は 2013 年から

・プロジェクトモニタリング部門
・財務管理部門
・知財基金・情報部門

・サイエンスパークマスタープラン・ワークグループ
の 4 部門構成となっている。サイエンスパークの建設については、現在ウランバートル郊外に大学の学園都市を建設し、学園都市内にサイエンスパークを建設することを計画しており、この運営を進める人材育成について検討を進めているとのことである。国際交流関係では、韓国、ベラルーシ、中国、台湾、ロシアなどとの交流がある。
参考：http://www.stf.mn

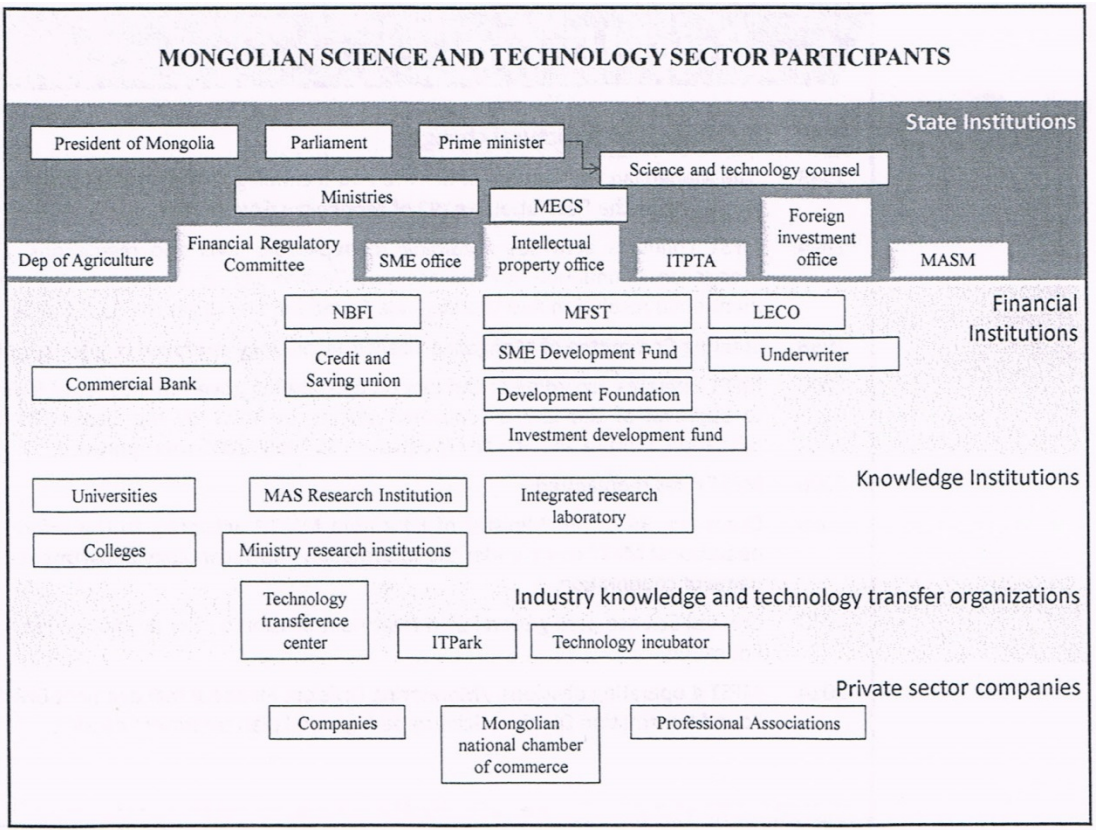


図７．MFST を中心とした科学技術セクターの構成
出典：MFST 資料（2014）
MECS: Ministry of Education, Culture and Science
NBFI: Non-bank financial institution
LECO: Labor Exchange Centre Office

（５）その他関係団体

●新産業創出機構(New Industry Association)（新産業会）
モンゴルの研究者、エンジニアの新しいアイデアと日本の研究者、エンジニアが有する技術とを組み合わせて付加価値の高い輸出可能な製品の開発を推進することを目的とし、かつエンジニアの交流の場として、またモンゴルの新産業の創出及び両国の発展に資する

活動を行うことを目指して、2015 年 1 月 Gantumur 教育文化科学大臣のもとに創設されたバーチャル組織である。運営委員としてモンゴル科学技術大学の Baasandash 副学長のほか、他関係省の官僚、大学、企業の関係者が含まれており、日本側から JST, AIST, JOGMEC および長岡技術科学大学をはじめ大学、企業で研究実績があり事業化・社会貢献の意志のある研究者の参加を募っている。活動は始まったばかりであるが、既存の各省傘下にある組織の枠内ではなく新しい流れを作ることを目指している。
参考：http://www.niam.mn （モンゴル語）

●JUGAMO (Japanese University Graduate Association of Mongolia)
1995 年創立の日本の大学で学位を取った者で構成される。400 名以上の会員がおり、SNS を使ってネットワークを形成している。イベント企画や留学説明会の共催などを行う。
参考：https://www.facebook.com/JUGAMO

●HAKASE（博士会）
2003 年に日本で博士号を取った 20 名の研究者によって創設されたネットワーク。現在 120 名の会員で活動を行う。現在の会長は Amarsaikhan モンゴル医科学大学副学長である。

●モンゴル日本人会
現在 160 名の会員で運営、JUGAMO とも共催する。
参考：http://blogs.yahoo.co.jp/zaimo_nihonjinkai

●モンツァメ国営通信社
モンゴルで最も長い歴史を有す報道機関。日本人向けにモンゴル情報を配信する「モンゴル通信」の発行元。JSPS 北京センターの最初のモンゴル訪問時には記事が掲載された。
参考：「モンゴル通信」：https://ja-jp.facebook.com/montsushinn

３－２．日本側学術関係機関

（１） 主な日本の政府機関

●在モンゴル日本大使館
清水武則大使のもとに、総括、総務・政務・経済班、経済協力班、広報・文化班、領事・警備班、官房班が置かれている。
参考：http://www.mn.emb-japan.go.jp/index_j.htm

●モンゴル日本人材開発センター（MOJC）
モンゴル日本人材開発センター（MOJC）は、国際協力機構（JICA）と教育省、モンゴル国立大学の協力により、2002 年に開設された独立採算機関で、経営管理指導など産業人

材教育活動を行う。2012 年より日本語教育ならびに相互理解促進事業について国際交流基金（JF）が協力している。センター内には国際交流基金の図書館もあり、毎年大使館、JASSO と共同してセンター内で日本留学説明会（例年参加 10 校内外、参加者数百名規模）を行う等、日本・モンゴル間の交流活動拠点となっている。
参考：MOJC:　http://jp.japan-center.mn/home.shtml
2014 年日本留学説明会：http://japancenter.jica.go.jp/article/2014.html

モンゴル日本人材開発センター外観

日本語学習書や日本紹介資料がある図書室

●JICA モンゴル事務所:
1990 年のモンゴル民主化の際に JICA が ODA 援助を行い、以来深く関わっている。現在学術関係分野では、2014 年から 10 年間の円借款事業として工学系高等教育支援事業（工学系基礎的人材の育成、借款総額：75.35 億円）があり、MNU と MUST に協力して教育機能強化、人材育成を、1,000 人の人材交流を含めて展開中である。その他石炭利用、ウランバートルメトロ建設事業、民間連携など各種事業を進めている。
参考：JICA　HP:　http://www.jica.go.jp/mongolia/office/index.html

（2）日本の大学事務所

モンゴルに所在する日本の大学の事務所については、JSPS 北京センターが訪問した事務所（名古屋大学、秋田大学）にウェブで検索できた情報を加えて表 3 に記載した。いずれもモンゴルの大学または近隣施設に事務所を置き、ダブルディグリーの授業や集中講義、交換学生のスクーリング、専門教員の研究拠点・研究会開催、同窓会ネットワーキング等々に活用している。名古屋大学のフィールドリサーチセンターは一連の汎用化学分析装置を収容したクリーンルーム実験室を持ち、学内研究者のみならず大学外からの利用も可能な分析センターとして機能している。

表３．日本の大学事務所の例

名称及び関連 URL	所在地
名古屋大学モンゴル事務所 http://nagoya-u.mn/?page_id=199&lang=ja 名古屋大学フィールドリサーチセンター http://www.num.nagoya-u.ac.jp/frc/index.html	ウランバートル市内 Tuushin Tower 内 モンゴル科学技術大学内 （化学分析実験室）
秋田大学モンゴル事務所 http://www.pcix.akita-u.ac.jp/inter/in_base.html	モンゴル科学技術大学内
徳島大学モンゴルオフィス http://www.tokushima-u.ac.jp/docs/2011070600036/	モンゴル医科学大学内
桜美林大学ウランバートル事務所 http://www.obirin-gakuen.org/wp-content/uploads/2011/11/Summer-2011.pdf	モンゴル文化教育大学内
帯広畜産大学モンゴルオフィス	モンゴル国立農業大学内

参考：　JSPS の 2014 年 4 月訪問の報告
http://www.jsps.org.cn/jspsbj/site/newsinfo/hdjp_detail.jsp?pid=952&ld=1399538555217&yu=J
文部科学省：海外における日本の大学の拠点（平成 24 年度）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/11/28/1353709_10.xls

他大学でモンゴルに事務所をお持ちの場合は当センターまで情報をお寄せ下さい。

４．日本の大学および JSPS の事業実施状況

（１）日本の大学の留学説明会・留学フェア

●日本センターにおける JASSO 他主催「日本留学説明会」

例年、高校生、大学生等留学希望者、大学等教育機関の国際交流担当者等を対象とした留学説明会・留学フェアがモンゴル・日本人材開発センターを会場として開催されている。2014 年に行われた内容は以下のとおりである。

・開催場所：モンゴル・日本人材開発センター（MOJC）
・参加者：11 日 748 名、12 日 371 名、合計 1,119 名

【日本留学説明会】

・開催日時：2014 年年 10 月 11 日（土曜日）
・主催：JASSO、在モンゴル日本国大使館、JUGAMO 会、協力：MOJC
・内容：日本留学概要、国費留学生制度説明、日本留学経験者による体験談の講演、

日本留学Q＆A、その他

・参考：JASSO HP：http://www.jasso.go.jp/study_j/info_fair_mongolia_2014.html

【日本留学フェア】

・開催日時：2014 年年 10 月 12 日（日曜日）

・主催：MOJC、共催：　国際協力機構（JICA）、モンゴル国立大学（NUM）

・参加大学：秋田大学、大阪大学、国際大学、京都大学、信州大学、名古屋大学、横浜国立大学、立命館 APU 大学、早稲田大学（計 9 校）

・内容：各参加大学と在モンゴル日本大使館・JASSO・JUGAMO による個別相談が実施された。

参考：JOMC HP: http://japancenter.jica.go.jp/article/2014.html

多目的室での「日本留学説明会」の様子（10/11 土曜日）

セミナー室に設置された個別相談ブースの様子（10/11 土曜日）

個別相談ブースで順番を待つ来場者たち（10/11 土曜日）

参考：http://japancenter.jica.go.jp/article/2014.html

（2）JSPS 事業説明会

2014 年度よりモンゴルにおける活動を開始し、主要大学における若手研究者および大学院生を対象とした事業説明会を開催するとともに、モンゴルにおける関連機関とのネットワークの構築活動を進めている。以下にその概要をまとめる。

●国立大学合同 JSPS 事業説明会

・日時：2014 年 10 月 21 日

・会場：モンゴル日本人材開発センター

・概要：Erkhembulgan 教育文化科学省高等教育長との協力により、国立大学の主要 8 大学に呼びかけ、各大学内の国際交流、研究、教育関係者 80 名の参加を得て開催した。JSPS 事業の説明、およびポスドクおよび招へい研究者フェローシップ、論博、HOPE Meeting 参加経験者の報告を行った。参加者にとって JSPS の活動はほとんど知られておらず、今回の説明には大きな興味をもってもらうことができた。参加した大学関係者には各大学における情報の周知を依頼したが、今後公募ニュースなど情報の継続的な流布に努める必要がある。

日本センターにおける JSPS 事業説明会の様子

●主要大学における JSPS 事業説明会

・開催大学：モンゴル国立大学、モンゴル科学技術大学、モンゴル医科学大学、
　およびモンゴル教育大学

・開催時期：2014 年 10 月 22 日～23 日

・参加者：各大学で研究者および学生 30-50 名

・概要：JSPS 経験者の報告も含めて説明。参加者の関心は高く質問も多く出た。日本の研究者とのネットワークをどのように構築すればよいか、といった質問も多く聞かれた。参加者の多くは国際交流経験が乏しく、また JSPS の公募情報などもほとんど知られていない状況である。今後情報配信の方法を確保し、基礎的な情報も含めた提供を継続的に進めることが必要である。

参考：JSPS 北京センターHP

http://www.jsps.org.cn/jspsbj/site/newsinfo/hdjp_detail.jsp?pid=1018&ld=1416464461639&yu=J

各大学のおける事業説明会: 左から MNU, MSUE, MSNMS, MUST での様子

●モンゴル国立大学における神戸大学シンポジウム・同窓会参加と JSPS 事業説明会

・実施大学：モンゴル国立大学

・実施月日：2014 年 9 月 26 日

・参加会議：神戸大学・モンゴル国立大学学術交流協定締結記念国際シンポジウム「日本とモンゴルの研究協力」
・参加者：モンゴル国立大学および神戸大学の研究者約 25 名
・概要：当日は、午前中に神戸大学とモンゴル国立大学の協定締結式が行われ、これを記念するシンポジウムが午後開催された。モンゴルと日本の専門家により歴史学、国際関係学、経済学、教育経済学などの状況と今後の交流の話題が討論された。この中で JSPS の学術交流事業の説明を行った。また、翌日には神戸大学の同窓生他約 30 名が参加してモンゴル同窓会の創立総会が開かれた。

大学間協定締結記念シンポジウムの様子

神戸大学同窓会の発足メンバの集合写真

参考：神戸大学 HP
http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2014_10_24_04.html
http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/alumni/Event/entori/2014/10/7_The_Kick-off_Ceremony_of_Kobe_University_Alumni_Association_in_Mongolia.html

●新モンゴル工業大学におけるセミナーおよび JSPS 事業説明会
・実施大学：新モンゴル工業大学（New Mongolian Institute of Technology, NMIT）
・実施月日：2015 年 2 月 25 日
・参加者：他大学の研究者・学生を含め約 50 名
・概要：当大学の Prof. Ch. Ganzorig 学長の招待により光技術のセミナーおよび JSPS 事業説明を行った。当大学は、定評ある新モンゴル高校の実績（モンゴル国内でも高水準で多数の日本留学生を輩出する）を基盤として 2014 年に J. Galbadrakh 理事長らが新モンゴル高専とともに創設した私立工業大学である。新年度生は約 80 名だが、今後増員の予定である。セミナーでは光技術に関する熱心な質疑が行われた。JSPS 事業説明については、はじめて知る参加者には情報提供を感謝された。また日本留学経験者からは応募条件や年齢制限など詳細な質問も出され、活発な討論が行われた。
参考：2014 年訪問の報告（JSPS 北京センターHP）

http://www.jsps.org.cn/jspsbj/site/newsinfo/hdjp_detail.jsp?pid=1052&ld=1428557671625&yu=J

新モンゴル工業大学の写真

学長、理事長、高専校長とともに

●教育文化科学技術省訪問と JSPS 事業説明

・訪問時期：2014 年 4 月 22 日および 2015 年 2 月 27 日

・面会者：Dr. P. Erkhembulgan 高等教育長　（4 月）

L. Gantumur 大臣（2 月）

・概要：JSPS の事業紹介と今後の交流について面談、事業説明会への協力を要請した。大臣とは今後の交流について面談した。大臣は、日本の科学技術教育に対して高い評価と極めて強い関心を持っている。大臣からの要望としてモンゴル行政官や若手研究者の研修・教育の可能性、また JSPS 側からの要望としてのモンゴル国内での JSPS 関連情報の広報、などについて今後検討を行う予定である。

モンゴル教育文化科学省本館

ｴﾙﾍﾝﾌﾞﾙｶﾞﾝ高等教育長(右から 2 人目)と

●モンゴル科学技術基金（MFST）訪問と JSPS 事業説明

・訪問時期：2014 年 10 月 22 日

・概要：Dr. Kaidav DONDOG（Director）他に面会し情報交換した。MFST の事業の性格は JSPS に類似している。また、現在ウランバートル近郊で建設中のサイエンスパークの計画・運営に携わる人材の育成について、昨年から作られた新しいチームで活動することを計画している。目下 MFST では、このことについて最も関心が高い模様である。ただし、今後 JSPS プログラムの広報、共同研究のプロモーションなどで協力が期待できる機関であり、情報交換・交流を続けていく。

ドンドック所長(左から 3 人目)らとともに

●モンゴル科学院（MAS）訪問と JSPS 事業説明
・訪問機関：モンゴル科学院（MAS）
・訪問日：2014 年 10 月 22 日
・概要：Prof. T. Galbaatar（Secretary General）に面会し、互いの状況説明を行った。なお、面談では直接の言及はなかったが、今後大学との融合も含めて交流が深まるものと見られる。専門領域の研究者が多数所属し、また日本留学経験者や JSPS フェローも多く含まれていることから、今後研究者に情報提供できるルートの開発が重要である。

（3）同窓会関連活動

●日本留学経験者の同窓会活動

モンゴルに事務所を持つ大学をはじめとして多くの日本の大学の同窓会が活動している。今後これらの活動が、モンゴルの各大学の教員や在学生との交流に発展していくことを期待する。

JSPS 事業経験者については、少なくとも 30 名以上が日本滞在を経験し、モンゴル在住のフェローも 20 名内外いるものと考えられるが、同窓会はまだ組織されていない。2015 年 2 月訪問時には現在モンゴル科学技術大学およびモンゴル国立大学の教員となっている JSPS フェロー数名との懇談を行い、名簿作成等の同窓会設立に向けた準備を開始した。将来 JUGAMO 会や HAKASE 会との共同などを通じて日本の大学のプレゼンスを示す活動が行われることも期待されるところである。JUGAMO 会や HAKASE 会には大学教員も多

く所属していると考えられ、若手研究者や学生との繋がりを持つこれらのメンバとの協力は重要であると考えられる。

５．おわりに

2014 年度に開始したモンゴルの学術状況に関する基本的な調査結果と 2014 年度に行った支援活動の概略を報告した。以下では要点のまとめと今後の展開について記しておく。

■モンゴルとの学術交流の状況

モンゴルは親日的で日本語学習者も多く、日本に留学する学生や若手研究者に対する大学教員の評価も高い。また教育文化科学大臣をはじめ産学官の要人にも日本の大学出身者が多数いるばかりでなく、日本の技術協力プログラムも多数進行中であり、2 国間の交流には好条件がそろっている。一方、国内では天然資源関連から始まった産業の急速な発展が続く中、サイエンスパークの構築を含めた新しい科学技術・研究開発システムへの動きや、大学とモンゴル科学院とが協力して研究開発機能の強化を目指す大学改革も進められようとしている。

■留学生・研究者獲得の好機

このような時期に学術分野における交流を発展させることは、大学留学生や優秀な若手研究者の獲得の面からも、また両国共通の課題の解決を目指して新たな研究領域を開拓する面からも、極めて重要であり、日本の大学や研究関連組織が一丸となって取り組むべき課題であると考える。さらに両国の交流にとって良好な環境が整っている現時点に勝る好機は今後も期待できないと言ってもよい。留学生や研究者の獲得のために、日本の大学や研究機関が十分な情報の提供と積極的な呼びかけを行っていくことが肝要である。JSPS としては今後若手研究者に対して各種プログラムの情報を幅広く提供していくのみならず、モンゴル側大学と協力してシンポジウムなどの学術イベントを実施することによって、他国には見られない日本の研究・研究方法・研究システムの特徴を理解してもらいたいと考えている。

■日本の大学・学術の魅力の発信

学術交流の促進に向けた方策として以下のようなものが有効と考えられる。

a. 定期的な留学説明会／JSPS 事業説明会
b. モンゴルの個別大学における留学説明会／JSPS 事業説明会
c. 学術シンポジウム・研究会による学術・研究交流
d. 同窓会などのネットワークを通じた大学・学術情報の広報
e. 日本の大学・学術研究の魅力の紹介と研究交流への勧誘

大学・機関の狙いと状況に応じて a~d の方策を組み合わせた戦略が考えられる。JSPS では 2014 年度 a, b を実施し、今後 c, d へと進めていくことを計画している。この活動の中で実感したのは、モンゴルの学生・若手が日本の大学や学術関連の情報をほとんど持たな

い、あるいは得る方法がなかったが、実は自らに関係する情報を渇望しているという状況である。日本の各大学関係者・研究者がまずこのことを認識し、上にあげた e に相当する活動、すなわち機会あるごとにモンゴルに出向き、それぞれの研究領域で仲間を増やし若手にその魅力を感じてもらうことが今後の発展の基盤となるものと感じている。学術の中身を語る研究者自身それぞれの活動があってはじめて、組織的な方策の効果が表れてくるものと考える。

謝辞

本レポートは、調査に不十分なところは多々あるものの、訪問・面談によって得た情報を中心にしてモンゴルの学術関連状況を現時点で報告することには一定の意義があると考えて作成したものである。2014 年 4 月の訪問は、モンゴルのことについて何も知らない我々にとって最初の訪問であったが、名古屋大学や秋田大学の方々、前モンゴル国立大学副学長の Ganzorig 先生（現新モンゴル大学長）のお世話によってようやく実現できた。特に名古屋大学の中村真咲先生（前 PhD 登龍門推進室准教授、現名古屋経済大学教授）には、多数の在モンゴル機関の方々をご紹介頂くなど、大変お世話になった。ここに記して深くお礼申し上げます。その後の出張の際にも、モンゴル教育大学の Dulamjav 国際部長をはじめ、多くの方々にお世話になり、また貴重な情報をご提供頂きました。報告の中ではすべての方々のお名前を記載できなかったことをお詫びすると同時に、頂いたご協力に対し深くお礼申し上げます。

本レポートの最終稿のとりまとめは和田修（センター長）が担当したが、レポート作成の過程で、加藤茂行元副センター長、渡邉幹博現副センター長、中山尚子国際協力員、瀧瀬由香理国際協力員、江岸助理、佘彬助理のご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

参考文献

1. 佐々木健悦「検証・民主化モンゴルの現実－モンゴル・日本の直面する課題―」社会評論社、2013 年
2. A. Pandey and G. Tsendsuren, “Challenges in Knowledge Management in Higher Education Institutes in Mongolia: A Report on Secondary Survey,” 30 Jun 2013, http://www.unimis.edu.mn/buteel/File/Download?id=5d6c2413-b57f-4b69-944d-bdde7654ec1e2013-06-30-IFOST-Challenges%20in%20Higher%20Education.pdf
3. SECTOR ASSESSMENT (SUMMARY): EDUCATION, Higher Education Reform Project (RRP PRC 43007), Asian Development Bank, http://www.adb.org/sites/default/files/linked-documents/43007-023-mon-ssa.pdf
4. 駐日モンゴル国大使館ホームページ：

http://www.tokyo.embassy.mn/jpn/index.php
5. 世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）文科省
www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm

資料１

モンゴル科学アカデミー(MONGOLIAN ACADEMY OF SCIENCES)研究所・施設一覧

	研究所・施設名	ウェブサイト
1	INSTITUTE OF PHYSICS & TECHNOLOGY	http://www.ipt.ac.mn/
2	RESEARCH CENTER FOR ASTRONOMY AND GEOPHYSICS	http://www.rcaq.ac.mn/
3	INSTITUTE OF INFORMATICS	http://www.informatic.ac.mn/
4	INSTITUTE OF CHEMISTRY AND CHEMICAL TECHNOLOGY	http://www.icct.mas.ac.mn/
5	INSTITUTE OF BIOLOGY	http://www.biology.mas.ac.mn/
6	INSTITUTE OF BOTANY	http://www.botany.mas.ac.mn/
7	INSTITUTE OF GEOECOLOGY	geoeco@magicnet.mn(ウェブサイト無)
8	INSTITUTE OF GEOGRAPHY	http://www.geography.mas.ac.mn/
9	INSTITUTE OF GEOLOGY AND MINERAL RESOURCES	http://www.igmr.mas.ac.mn/
10	CENTER OF PALEONTOLOGY	http://www.paleo.mas.ac.mn/
11	INSTITUTE OF LANGUAGE AND LITERATURE	http://www.lang.mas.ac.mn/
12	INSTITUTE OF HISTORY	http://www.history.mas.ac.mn/
13	INSTITUTE OF ARCHAEOLOGY	http://www.archaeology.mas.ac.mn/
14	INSTITUTE OF PHILOSOPHY,SOCIOLOGY AND LAW	http://www.ipsl.mas.ac.mn/mn/
15	INSTITUTE OF INTERNATIONAL STUDIES	http://www.iis.mas.ac.mn/
16	MONGOLIAN DEVELOPMENT INSTITUTE	http://www.mdi.gov.mn/
17	INSTITUTE OF MINERAL PROCESSING TECHNOLOGY	http://www.impt.mas.ac.mn/
18	SOCIAL-ECONOMICAL RESEARCH CENTER IN BAYAN-ULGII PROVINCE	an.nezst@yahoo.com,gzolba@yahoo.com(ウェブサイト無)
19	CENTRAL ANALYTICAL LABORATORY	ulnsmas@yahoo.com(ウェブサイト無)

20	TECHNOLOGY INCUBATOR	http://www.tech-inc.mas.ac.mn/
21	INTERNATIONAL INSTITUTE FOR THE STUDY OF NOMADIC CIVILZATIONS	http://www.nomadic.mn/
22	RESEACH CENTER FOR FISHBREEDING	http://www.mas.ac.mn/
23	LIBRARY OF RESEARCH	http://www.library.mas.ac.mn/
24	MONGOLIAN ACADEMY OF MEDICAL SCIENCE	http://www.mams.mn/
25	MONGOLIAN ACADEMY OF AGRICULTURAL SCIENCE	http://www.maas.edu.mn/